

吉井勇と京都

——『酒^{さか}ほがひ』の成立をめぐる——

内 田 品

一、はじめに

吉井勇が「スバル」に「京都より」と題した短歌二十一首を掲載したのは一九一〇（明治四十三）年六月号である。そこでは勇の生涯を通じた代表作となった「かにかくに祇園はこひし寝るときも枕のしたを水のながるる」の一首が冒頭に置かれている。祇園白川沿いに勇の生前に建てられた歌碑にも採られたこの作品は、この後第一歌集『酒ほがひ』（一九一〇年九月）の「祇園冊子」の章に収められ、勇の歌人としての業績を代表する『酒ほがひ』の中でも最も人口に膾炙した一首となった。塚本邦雄は「この有名歌集のクライマックスは、今日まで百人中九十九人までは、巻中の群作「祇園冊子」と目してゐるやうだ。聞くなりなく、戯曲『偶像』で得た稿料で、初めてこの遊里

に過した「体験」を三十一音化したと伝へる。さすがこの歌集の声価を決定したと称されるだけに、今日も文献としての価値は失つてゐない。所詮は一遊治郎の、深刻めかせたロマンティックな太平楽に過ぎないと、一笑し去る人はあるよう^①と述べている。塚本は「祇園冊子」を「軟弱輕薄」、「遊治郎の鼻歌に辟易^②」と評し、この歌集中「夏のおもひで」の章を高く評価しているが、「祇園冊子」がこの「歌集のクライマックス」と目されていることは認めている。だが、歌集中のクライマックスと目していた「百人中九十九人」は読者だけにとどまらず、その中は作者自身も含まれているのではないだろうか。まず、吉井勇が京都に出会い、そこに魅了され、祇園の歌を詠み始めるまでを見ていきたい。

二、京都との出会い

一八八六（明治十九）年十月八日に東京市芝区高輪の伯爵吉井幸蔵の子として誕生した吉井勇は、幼少の一時期を別荘のあった鎌倉で過したが、一九〇五（明治三十八）年に攻玉舎中学校を卒業して与謝野寛主宰の新詩社に参加し、歌人として本格的な活動を始める時期に至るまで東京で育った。与謝野寛の門を叩き、新詩社の同人たちと交わるようになったことは、勇が京都を訪れるきっかけをもたらしした。

勇が初めて京都を訪れたのは一九〇六（明治三十九）年のことである。

新詩社の人たちとさらに親しくなったのは、明治三十九年八月、与謝野寛先生を先達に、北原白秋、茅野蕭々と一緒に、伊勢、紀伊、京阪などを旅行した時からであって、この時は名古屋から伊勢路に入り、宇治山田では沢瀉太夫という御師の宿に泊まったが、のちに京都に住むようになって偶然の話から、これは沢瀉久孝君の生家だということ⁽³⁾がわかった。

この時は伊勢・紀伊を巡った後、京都に入ったようである。

ただし八月というのは勇の記憶違いで実際には十一月のことであったという⁽⁴⁾。勇が後年著した『洛北随筆』には京都での様子についても少し詳しい記述も見られる。

しかし私が京の土を踏んだのは、この時が始めるのではなく、その前年の明治三十九年の晩夏、やつぱり与謝野先生に率ゐられて、北原白秋、茅野蕭々の二人とともに、伊勢、紀伊、奈良などを遊歴した帰り途を、京阪で数日過したことがあつたが、これがそもそも京を訪れた最初だつた。この時分は北原君も私もまだ早稲田の文科に通つてゐる頃で、二人とも金釦の附いた学生服を着てゐたが、紀州の木の本でその土地の新聞社長に案内されて、鬼ヶ城見物に出懸けた時などは、接待に附いて来た年増の芸者を、その社長の奥さんと間違へて、終始さういふ挨拶をしてゐた位の無邪気さを、まだ二人は持つてゐたのである。

（中略）新宮、那智、和歌の浦などを見物してから大阪に一泊、それから京都に往つたのだが、泊つたのは鴨川の西岸、三本木あたりにあつた、当時箏曲の師匠をしてゐた鈴木故村の家で、王朝風の服装で便々たる腹を突き出しながら、美しい女弟子の間に交つて、悠然と箏を弾じてゐた鼓村君の姿は、今でも私の目に残つてゐる⁽⁵⁾。

紅灯花街での遊蕩のイメージの強い勇が、まだ芸者についてよく解っていなかったかのような記述も興味深いが、京都に入った一行は三本木にあった邦楽家鈴木鼓村の家に泊ったという。三本木は現在の河原町丸太町の北西あたりで、鴨川の右岸にあたり、頼山陽の書斎もあった風光明媚な場所である。ここにあった吉田屋の芸妓幾松が木戸孝夫人となったことで知られるように、幕末までは遊廓（花街）になっていたが、明治初年に廃止され、この頃は旅館街という。⁽⁶⁾

こうして生まれて初めて京都の地を踏んだ勇だが、鈴木鼓村の姿を除いて印象に残ったものはなかったらしい。後年の随筆や回想文には先に引用した程度の記述しかないからである。

ところで、吉井勇自身、最初の一九〇六年の京都訪問を忘れたのか、後の三度目の京都訪問を指して「二度目」と述べている文章もあるが、『洛北随筆』では、別の章でも「私が始めて嵐山に遊んだのは、もう今から三十年ほど前、まだ二十一二歳の頃のこと、与謝野先生に伴れられて伊勢紀伊の方に旅をした帰りに、北原白秋、茅野蕭々など新詩社の人達と一緒に来たのが最初だったと思ふ」とも述べていて、ここでは比較的はっきりと記憶している。

吉井勇が二度目に京都にやってきたのは翌一九〇七（明治四十）年、『五足の靴』として名高い新詩社同人五人による

九州旅行の帰途である。京都に入ったのは八月下旬で、勇と同行していたのは与謝野寛と木下李太郎の二人であった。北原白秋は柳川の実家に留まり、平野万里は一足早く帰途についていたからである。⁽⁸⁾ 勇はこの旅行で初めて京都の舞妓と出会った。

先斗町といへば私には、これ（引用者注・後述する一九一〇年の三度目の京都旅行）よりもまだ数年前、唯そこを通りぬけたただだが、長くつづいた軒行燈をなつかしと見て過ぎた思ひ出がある。それといふのは外でもない、たしか明治四十年の夏のことだっだと思ふが、北原白秋、木下李太郎、平野万里の三氏とともに、与謝野寛先生に伴はれて、博多、平戸、長崎、天草、阿蘇、柳河など九州の各地に、歌行脚といったやうな旅をした時、帰り途に京都に寄り、はじめて与謝野先生の案内で舞妓といふものを見せられた晩、まだ宵花で賑はつてゐる先斗町の一廓を通りぬけて、京の色街の艶めかしさに、胸をときめかせたことがあつたのである。その時一行の五人が分担して書いた、約二十回ほどの紀行文は「五足の靴」といふ題で、二六新報に連載されたが、今から三十年も前のことであるし、散逸しやすい新聞のことだから、今ではもう誰の手許にも残つてゐまいと思ふと、何だかもう一度読みかへして見たい

やうな、懐旧的な愛着が感じられてならない。その紀行文の中で、私が担当したのは、丁度その始めて舞妓を見るといふ一節だったが、それに私はどんなことを書いたか、今では全然記憶がないだけに、再び読み返して見たいという希望も一層強いわけなのである。⁹⁾

勇はさらに「私の履歴書」で「さらにまた、翌明治四十年の七月から八月にかけて、遠く九州方面へ旅行をすることとなった。今度は、与謝野先生のほか、北原白秋、木下李太郎、平野万里、それに私の四人だったが、与謝野先生だけが黒い背広で、あとの四人はみんな金ボタンのついた学生服を着ていたのだから、よそ見にはまるで修学旅行のように見えたかもしれない。」と書いているように、まだ学生風の四人を、一回り年長の与謝野寛が率いているかのような旅行であったが、与謝野寛は若い勇と木下李太郎に舞妓を見せたのである。『洛北随筆』で「今ではもう誰の手許にも残つてゐまいと思ふ」と言っていた紀行文『五足の靴』は、「東京二六新聞」に約一ヶ月、二十九回に渡って連載された後、長らく埋もれていたが、戦後になって野田宇太郎が発掘し、『日本耽美派文学の誕生』などで取り上げたことで再び光が当たることになる。『洛北随筆』の発行された昭和十五年当時はまだ埋もれた存在であった。

『五足の靴』は五人の持ち回りで執筆され、実際の旅行から十日前後遅れながら連載されたが、署名は「五人づれ」であり、各章が誰の手によるものかは記述がない。さらに、「五足の靴が五個の人間を運んで東京を出た。」という一文で始まるように、「五足の靴」を語り手の主体としている。けれども勇自身が『洛北随筆』で「その紀行文の中で、私が担当したのは、丁度その始めて舞妓を見るといふ一節だった」と述べているので、その部分は勇に近い視点で書かれた文章と考えることも一応可能ではあるだろう。また『五足の靴』では、五人はイニシャルで表されていて、勇は「I生」、与謝野寛は「K生」、木下李太郎こと太田正雄は「M生」といった具合になっている。

京都まで帰つて来た。K生の故郷だし、他二生（引用者注・I、Mの二生）の曾遊の地でもある、なつかしい母親の懐に入る心地がする。我らの詩社の同人が定宿である三本樹の『御愛さん』方に宿る、御愛さんは娘さんの名で、宿の名は信楽。三本樹といへば昔も今も京都通の喜ぶ街だ、寂れてゐるから静かだ、それが第一京都らしくて佳い。（『五足の靴』〔西京〕）

前年に引き続き新詩社同人の定宿であった三本木に泊って

いる。「御愛さん」は与謝野晶子が歌集『舞姫』（一九〇六年一月）を献呈した相手でもある。

灯の輝く街を幾つか過ぎた。流るるやうな人々と袖すり交して、京極を通り、先斗町を抜けて四条の大橋に出る。河原の納涼は橋より上に限られて昔ほど盛でもなく、また随分俗化して当年のしめやかさを幾分没したにせよ、古い京の風俗の傍は残つてゐる。橋を渡つて祇園に入つた。

舞姫は夢の女である。過ぎし夜の夢の中で捉へやうとして捉へ難き美しい女を見た時の思は、やがて眼のあたり舞姫を眺めた時の思に似通つてゐる。黒髪の匂ひが七重に自分を巻いて、美しい幾匹の蜘蛛の乙女がひらひらと五色の糸を散す。我は魔薬に酔つてゐるのではあるまいかと、温かい恐怖を覚えた時、初めて祇園に在つて舞姫に取囲まれて居る事を知つた。一人の舞姫はよく語る。お妻八郎兵衛から油屋お紺になり、北野の天神祭から黒谷の十夜になる。長い袂を膝の上に重ねて、その上で赤い扇を弄ぶ。笑うたびに簪がゆれる。奇麗な声が見えぬからと灯の前に廻すと、扇で顔を半掩うて『おお、はれがましや』と笑う。人形の美だ。人形が物を言ふのだ。舞をと望む。人形が立ちて舞ひ出す。帯の揺ぐのも、袂のなびくのも、扇の翻え

るのも、すべて線が長閑に円い、全くの調子が韻文的だ。春雨一曲、所作は短いが我らの感興は長い。『五足の靴』

〔西京〕

幻想的な記述が印象的である。新聞の読者の中にはこれを読んで京の舞妓に憧れを持つものもいただろう。ところが勇の後年に随筆には次のような記述もある。

私が京を訪れたのは、明治四十年の八月の末、九州の旅の帰り途に、与謝野寛、木下杢太郎、北原白秋、平野万里の諸君と一緒に往つたのが最初であつた。が、その時は九州も天草の果まで往つた、一月近い長旅のために、すっかり疲れ切つてゐたので、受けた印象も甚だ薄い。茶屋の名を書いた軒行燈が仄黄いろく点つた、先斗町の通りが、氣味の悪いほど狭くつて長かつたことや、川端のある茶屋の二階で始めて見せて貰つた舞姫が案外美しくなかつたことや、大原に往く道すがら妙に旅の寂しさを覚えたことや、そんなことが断片的に思ひ出されて来るだけで、さう云つた京の印象よりも、二六新聞に連載したその時の紀行「五足の靴」にも書いたやうに、帰京の汽車中で偶然米原から乗り合はせた美しい三人姉妹の方に、どの位強く心を惹か

れたか分からなかった。

「星が飛んだね」

如何云ふ意味だか忘れたが、隣席に座してゐた木下李太郎が私に向つて、揶揄するやうな調子でかう云つたのを覚えてゐる。(吉井勇『雷』一九四二年四月天理時報社「京洛編」)

『五足の靴』では舞妓をあれだけ印象的に表現していたのに「すっかり疲れ切つてゐたので、受けた印象も甚だ薄い」ばかりか、「川端のある茶屋の二階で始めて見せて貰つた舞姫が案外美しくなかった」とまで言い切つていて拍子抜けさせられるほどである。『五足の靴』の創作性が強かつたと見ることもできるし、「五人づれ」の他のメンバーの手が入っていたのかもしれない。また、「帰京の汽車中で偶然米原から乗り合はせた美しい三人姉妹」についての記述は『五足の靴』ではなく、『雷』執筆時には、勇自身の記憶が曖昧なものになつていたといふことも言えそうである。京都を立ち東京に帰る部分は『五足の靴』では「彗星」の章にあたるのだが、この章は「I生」と「M生」を客観視しながら「予」が語る文体で書かれていて、与謝野寛の手になるやうな印象を受ける。いずれにしても勇のこの時の舞妓に対する印象は、「祇園の歌」を生み出すよ

うな決定的なものとはならなかったのは確かである。それでも、舞妓を見たことは勇にとって大きな経験となつた。

三、祇園歌人吉井勇の誕生

吉井勇が祇園の歌を誕生させるのは三度目の京都訪問であつた。この時の思い出についても、勇本人による記述が『洛北随筆』にある。多少長くなるが引用する。

それは明治四十三年五月のこと、私はその前月の「趣味」といふ雑誌に、「偶像」といふ二十数枚の短い一幕物の戯曲を書き、生れてはじめて原稿料といふものを得たところから、何かこれを生涯の記念になるやうなことに費はうと思つて、いろいろ考へた末、結局それを旅費にして京都へ往くことにしたのだが、上田先生をお訪ねしたのも、たしかこの時のことだと思ふ。

何しろその時得た原稿料といふのが、僅かに金拾円であつて、汽車賃などを払つてしまふと、囊中頗る乏しくなつたので、京都へ着いても宿を取ることが出来ず、先づ頼つて往つたのが、当時これも高等学校の先生をしてゐた茅野蕭々君のところで、着いた晩に茅野君に連れられて、先斗

町の鴨川踊を見に往つたことを、今でもはつきり覚えてゐる。その時は一週間ほど京都に滞在してゐたのだが、その間には岡本橋仙、鈴木鼓村などといふ好事の人達に誘はれて初夏の一日を宇治に遊び、平等院や黄檗山を見物した揚句花屋敷に往つて泊つたり、橋仙君の弟で今三条の旅館万屋の主人となつてゐる金子竹四郎君に案内されて、はじめて祇園の末吉町あたり、白川に近い古びた茶屋に遊びに往き、黄色い蠟燭の灯かげで見た舞妓の美しさに、思はず恍惚として夢見ごちになつたり、いろいろと長く忘れることの出来ない印象を残して、帰りの汽車賃は家の方から送つて貰つて、やつと東京へ立ち戻つて来た。

私はその前年から、石川啄木、平野万里の三人で、毎月交互に編輯することにして、第一次「スバル」を発行してゐたところから、帰ると直ぐに今度の旅で得たいいろいろの印象の中でも、最深く心に残つてゐる「祇園」のことを主として、十首ほどの歌を作り、とりあへず翌月の「スバル」に載せたところが、これが思ひの外評判がよかつたので、更に翌々月の雑誌にもつづけて又二十首ばかりを発表した。『洛北随筆』

「着いた晩に茅野君に連れられて、先斗町の鴨川踊を見に往

つたこと」や、「金子竹四郎君に案内されて、はじめて祇園の末吉町あたり、白川に近い古びた茶屋に遊びに往き、黄色い蠟燭の灯かげで見た舞妓の美しさに、思はず恍惚として夢見ごちになつた」ことが「長く忘れることの出来ない」ものとなつたようである。随筆『雷』『京洛編』では「都踊はもうなかつたけれども、鴨川踊の提灯が、加茂川の水に艶めかしい灯影を映してゐて、先斗町の茶屋茶屋の前には踊見の人波が流れてゐた。」と述べており、勇が京都を訪れた時期に合わせて茅野蕭々は先斗町を案内したのである。茶屋は「祇園の末吉町あたり」とあるので、現在「かにかくに」の歌碑の建つあたりにかなり近い。

この旅行で吉井勇が得たものは非常に大きかった。「帰ると直ぐに今度の旅で得たいいろいろの印象の中でも、最深く心に残つてゐる『祇園』のことを主として、十首ほどの歌を作り、とりあへず翌月の『スバル』に載せた」とあるが、「スバル」明治四十三年六月号（五月三十日印刷・六月一日発行）に「京都より」と題された二十一首を見ることができる。

かにかくに祇園はこひし寝るときも枕の下を水のながるる
西鶴の五人女のなかの子かわれをとらへて放たざりしは
明眸も瓦にひとし抱かねばかの三栄のあたひ無きこと

紅樓夢なほ覚めざるにおどろきぬ牡丹を見ては口をおもへる

女紅場の提燈あかきかなしみか加茂川の水あをきうれひか
七日ほど春宮冊子のなかに住みわが魂は消えて失せつも

仁丹の広告も見ゆ橋も見ゆあまぼろしに舞姫も見ゆ

むくつけき東夷もころろ浮き百年かへることを忘れぬ*

おしろいは厚きが可かり口紅は濃きが可かりと云ふは誰が
子ぞ

舞姫とともにわたればおもしろし四条の橋も五条の橋も*
円山の長椅子に凭りてあはれにも娼婦のあそぶ春のゆふぐ
れ

香煎の匂ひしづかにただよへる祇園はかなし一人歩めば
ゆるやかに『だらり』の夢のうごく時はれがましやと君の
云ふ時

先斗町のあそびの家の灯のうつる水なつかしや君とながむ
る

落ちたるは地獄太夫か黒髪か千鳥が置きて往きし柳か
南座の幟の音がころろくわが机までびびき来る時

さかづきす岡崎にすむ先生の髭なつかしと云へる女に
やみあがり吉弥がひとり河岸に立ち河原蓬に見入るあはれ
君とゆく河原つたひぞおもしろき都はてるの灯としごろ

を

めずらしき清元を誰が歌ふらむ祇園そぞろに吉原おもほゆ
そのむかし伊左が慕ひし軒行燈伊左のごとくにわれも慕へ
る

世に名高い「かにかくに祇園は恋ひし」が冒頭を飾っている
ほか、『酒ほがひ』の「祇園冊子」四十九首中の十九首がこ
で発表されている。*印を付した二首は『坂ほがひ』には収録
されなかった。吉井勇の短歌の特徴のひとつとして、固有名詞
の詠み込みが目立つことはしばしば指摘されているが、「吉
弥」という人名や、「西鶴の五人女」「紅樓夢」「伊佐」「夕霧
阿波鳴渡」の主人公藤屋伊左衛門^⑩などの古典にまつわるもの
とともに、「女紅場」「加茂川」「円山」「先斗町」「南座」など
の地名も多い。

七首目の「仁丹の広告」はおそらく当時の都市風景を象徴す
るものであった。勇の第二歌集『昨日まで』には東京を詠んだ
「東京の秋の夜半にわかれきぬ仁丹の灯よさらばさらば」と
いう歌もある。ここでは眼前の「仁丹の広告」「橋」と「まぼ
ろし」の「舞姫」を効果的に対比させている。

十九首目「都はてる」はこの頃刊行されていた『京都府写真
帖』（京都府庁編 一九〇八年二月）に「三条粟田口の東、華

頂山吉水園内に在り、大日本ホテル株式会社の事業にて地域二万坪、建物総坪数二千五百坪現今百五十の客室を有し明治四十年中の宿泊人員三千五百余人なり此旅館の後庭には三十九年三月来朝ありし英国皇甥コンノート殿下手つから植へられし記念の松樹あり」とある瓦屋根洋風建築のモダンなホテルであった。

この六月号の巻末にある「消息」(編輯発行人江波文三によるもの)には「○彗星と云ふものが此頃空に出る。漚くりが指の先で空に穴を穿けたので、夜も其処から日光が射し込んでゐるのぢやあるまいかと思ふ。○彗星や空に穴を穿ける漚くりと何の関係があるか、知らないけれども、吉井勇氏は京都の方に行つた。」とある。この年ハレー彗星が七十六年ぶりに接近し、世を賑わわせていた。

『洛北随筆』では「これが思ひの外評判がよかつたので、更に翌々月の雑誌にもつづけて又二十首ばかりを発表した」とあるが、七月号に勇の歌はなく、「消息」欄に「○吉井勇氏は病気で入院してゐる。○昂八月号へ載る原稿の中、もうわかッてゐるのは、吉井勇氏の歌、(後略)」とあるので、東京に戻った勇は体調を崩していたらしい。ただ、この号の『歌集酒ほがひ』の広告の中にはすでに「目次」が示されていて、「目次」には「祇園冊子」の見出しもすでにある。

「スバル」明治四十三年八月号には、予告どおり祇園にまつわる二十一首の歌が「紅粉篇(京都雜詠第二)」と題して発表された。ここで発表された二十一首は全て『酒ほがひ』に採られることになる。

舞ごころも MONTMARTRE の夜のいろを思へとばかり袖ひるがへる
巴里の風椽を吹くにもまがふべし祇園の風は青柳を吹く
鳥辺野へ夜半にゆかむと云ふは誰ささやかはす舞姫のなか
蓬の香水の香さては紅粉の香とさまざまにもの匂ふ家
つと入れば胸おしろいに肌ぬぎし君あり我に往ねと云ひける
大勝の女主人がふとりたるからだのごとく暑き夏の日
木屋町の酔へるがごとき夜のいろに見惚れて君を忘れし子
なり
簪はたまたま風にゆらめきぬ愛宕おろしの君に吹く時
かなしみを捨てむと京に來しものをあはれや更に得て帰
ける
ねむたげの眼のまたたきに誘はれて蛾は來たるらし種次の
膝に

叡山の荒法師とも云ひつべき人と遊びていなづまを見る
 白き手がつと現はれて蜩燭の心を切るこそ艶かしけれ
 ゆゑ知らず涙ながれぬ閉されし歌舞練場のまへを過ぐれば
 あかつきの光のなかになまめくは雑魚寝寝起の細帯のひと
 かちわたり河原に来よと第一の舞姫を呼ぶ第二の舞姫
 舞扇かかるうれしきそよ風をわれに送らむために開くや
 緋の帯はかなしげに云ふ七日ほどわかき主のもの思ふこと
 この家を真葛が原にかたどりて遊ばむと云ふ子もありしか
 な

媚もなき彫られしごとき君が眼をひとりかなしむ夜の燭の
 まへ

長江の華舫のなかに見る時はふさはしからむ京の舞姫
 われをかし祇園に入りて祇園に入りてあはれにも昼なき人
 となりにつらしな

六月号に掲載された作品には、近代都市京都を象徴する景物
 も詠み込まれていたが、この八月号には京都にパリを重ね合
 せた歌が見られる。一首目で祇園と重ね合わせている
 「MONTMARTRE」はひとときわ目を引くし、二首目では「祇
 園」の「青柳」と「巴里」の「椽」を重ねている。三好行雄は
 「祇園の歓楽にパリの驕奢が二重写しされるのだが、紅燈の巷

への耽溺がエキゾチシズムの裏返しだった事情が示されてい
 る。それはスバル派の耽美主義の特色のひとつでもある^①と述
 べている。こうしたパリを「二重写し」した歌がわずかなこと
 もあり、吉井勇と京都を論じるうえでも格段取り上げられるこ
 とがないが、「エキゾチシズム」の舞台としての京都というの
 は興味深い指摘であり、他の耽美派作家の作品も含めて今後の
 検討に値するであろう。

「スバル」明治四十三年九月号の「消息」には「○吉井勇氏
 は退院した。(中略)○吉井勇氏の歌集『酒ほがひ』は愈九月
 七日に出る。意気なうすい本である。」とあり、歌集の広告に
 も「九月七日発行」の文字がある。

実はこの「スバル」誌上の『酒ほがひ』の広告は創刊号、つ
 まり明治四十二年一月号にすでに「(近刊予告) 吉井勇作 歌
 集酒ほがひ 全一冊」と一頁全面を使って掲載されている。紅
 野敏郎は「ところが『酒ほがひ』の刊行は、近刊どころか、一
 年半以上おくれた翌年の九月である。『桐の花』についてもい
 えるが、ともに著名な第一歌集の刊行に、広告とは違った大き
 な差があったという事実は押さえておかねばならぬ。『酒ほが
 ひ』成立をめぐる^②の、初出との関係を通しての精密な調査を
 必要とする」と述べているが、明治四十二年初頭の段階で歌集
 の刊行を決意していたものの、どこかに不十分さを感じていた

勇が、京都旅行によって得た祇園の歌によってそれを補い、「祇園冊子」を加えることで歌集の刊行に踏み切ったと考えておきたい。もちろん「初出との関係を通しての精密な調査」が必要であり、引き続いての検討課題としたい。

四、むすびに

このように、吉井勇と祇園との出会いは、偶然によるところも多いが、それによってもたらされた成果は、勇自身にとって期待以上の大きなものになったことが伺える。その後の勇は、一時期戯曲に熱中したりしたもの、東京にあっても、紅灯の巷で遊蕩生活を続け、しばしば京・大阪にも遊び、「祇園もの」の歌も「祇園冊子」の延長線上にある歌集『祇園歌集』(大正四年十一月刊)、『祇園双紙』(大正六年七月刊)などへと引き継がれていくが、木俣修が「かつての祇園の歌と比べると低調であり、情感が希薄であるといわざるを得ない」「勇の遊里中心の享楽の歌はもはやむしかえしくりかえしにすぎないものとなってしまった⁽¹³⁾」と言うように新鮮味のないものになっていく。この後、勇は妻の醜聞の末の離婚、土佐での隠棲生活などを経て、昭和十三年、京都北白川に居を構える。この時期になると京を詠んでも自然や人生の侘しさに目を向けたものが多く

なる。戦中戦後の一時期に越中や京都府下八幡での生活を余儀なくされるものの、その生涯を閉じるまで京都に暮らした勇の晩年の作品については、青年、壮年期の「祇園もの」との比較や、戦後に手がけた「都踊」の歌詞との関係なども含めて検討が必要であるが、長い期間にわたるものでもあり、稿を改めて考察してみたい。

注

- (1) 塚本邦雄「海の墓」『短歌』一九九〇年十一月号
- (2) (1) に同じ
- (3) 吉井勇「私の履歴書」『私の履歴書第八集』日本経済新聞社一九五九年四月所収
- (4) 宗像和重『五足の靴』「解説」岩波文庫二〇〇七年五月
- (5) 吉井勇『洛北随筆』一九四〇年四月甲鳥書林 ただし吉井勇の著作は「私の履歴書」を除いて番町書房刊『吉井勇全集』による。
- (6) このあたりのいきさつは、河野仁昭『京都文学紀行』(一九九六年二月京都新聞社)の「吉井勇と京都」に詳しい。
- (7) 吉井勇『雷』一九四二年天理時報社の「京洛篇」
- (8) 『五足の靴』の「徳山」の章に「H生は暫く柳河に留る、B生は京都まで直行する、あとの三人の無関心組は周防の徳山に下車した」とある。
- (9) 吉井勇『洛北随筆』
- (10) 『日本近代文学大系五五 近代短歌集』の吉田弥寿夫による補

注

- (11) 中央公論社『日本の詩歌』〔鑑賞〕
- (12) 紅野敏郎『明星』『スバル』時代の吉井勇〔『短歌』一九九〇年十一月号〕
- (13) 木俣修『吉井勇 人と文学』

(ウチダ アキラ 嘱託研究員)